吉村和雄「説教批判・説教分析について」を用いた説教分析の実践

2026 年 9 月 28 日　安井聖

1.分析対象とする説教

説教者●カール・バルト

聖書箇所●ヨハネの手紙一第 4 章 17 節以下

説教題●囚われ人に解放を

説教が行なわれた状況●1954 年 8 月 1 日、バーゼル刑務所における受刑者のための礼拝式

2.吉村和雄「説教批判・説教分析について」（以下、吉村分析論の略称）を用いた説教分析の方法

吉村分析論を用いて説教を分析する際の核心は、Ⅳの 2 で述べられている、A 説教者はここで何をしようとしているか、B その結果どのような出来事が起こったか、C どうしてそうなったか、という三つの問いから分析することにある、と思われます。そしてこれらの三つの問いに答えるために、第一印象、説教の構造、四つの言葉、鍵になる言葉、語り口などを具体的な分析の手がかりとして用いて説教を分析するよう提案されています。

そこで以下の手順で、このバルトの説教を分析していきます。

・説教を聴く（説教を朗読する）。
・第一印象を発表する。→B
・説教の構造を把握する。→A
・説教の言葉を四つの言葉に分類し、考察する。→A
・鍵になる言葉を提示し、考察する。→A
・語り口を考察する。→A
・自分の第一印象の理由を考察する。→C

3.説教を聴く（説教を朗読する）。

4.第一印象を発表する。

5.説教の構造を把握する――この説教は聴き手をどこへ動かしているのか

ここからは、吉村分析論を用いて、この説教の構造を見ていきます。ここでいう「構造」は、説教をいくつかのテーマに分類して内容を整理する、という意味ではありません。説教は、文章として完成したものを目で読むのではなく、実際には時間の流れの中で語られ、聴き手は一つ一つの言葉を時間の経過と共に順番に聞いていきます。したがって、説教の構造を見るということは、そのような説教が、時間の経過の中で、聴き手をどこからどこへ動かしているのかを見るこ

とだと考えます。そこで、ここでの中心的な問いを、「この説教は何を言っているのか」ではなく、「ここで説教は何をしているのだろうか」、「ここからどこへ聴き手を動かしているのだろうか」としたいと思います。そのような問いを重ねつつ説教の言葉を辿り、その言葉の動きを発見していければと思います。

まず、説教は「回心」という言葉から始まります（7 行目）。バルトは、私たちは皆「回心」という言葉を聞いたことがあるだろう、と語り、さらに「あなたが本当に必要としていることは、あなたが回心することです」（11〜12 行目）という方向へ聴き手を置きます。ところが、ここで説教は「回心とは何か」という説明を続けるのではありません。ヨハネの手紙一第 4 章 18 節の「愛には恐れがない。完全な愛は恐れを取り除く」という言葉へ進んでいきます（22 行目以下）。つまり、「回心」から「恐れ」と「愛」の問題へと説教が動くわけです。ここで皆さんに考えてもらいたいのは、「なぜ回心の話が、恐れと愛の話へ移るのだろうか」ということです。単なる話題の変更ではなく、説教者が一つの問題を、次の問題へと押し進めていると見ることができます。さらに「愛の内」という聖書の表現が、「内にいる」という空間的なイメージへ展開され、やがて「家」のイメージが現れます（23〜37 行目）。抽象的に受け止められるかもしれない「愛の内」が、「家の内にいる」という具体的な空間として語られることで、説教の中に「内／外」という関係が生まれてきます。

しかし、バルトはそのまま「愛の家」の説明を続けません。次に、私たち人間の愛の現実へと話を進めます（38 行目以下）。私たちは人を愛している。しかし、その愛の中にも恐れが入り込んでいる。愛する人を失うことを恐れ、過去や未来や死を恐れ、さらには自分自身を恐れる。このようにして、「愛の内には恐れがない」という聖書の言葉と、「私は恐れている」という人間の現実とが並べられます（62〜72 行目）。そして、そこから「完全な愛」へと説教が進みます（73 行目以下）。ここで重要なのは、「完全な愛」を単に「もっと強い人間の愛」として説明しているわけではないことです。「契約」「神」「キリスト」へと話が進むことによって、「完全な愛」が人間の側の達成すべき理想ではなく、神が私たちに対してなさることと結びついていきます（80〜144 行目）。ですから、ここまでの動きを暫定的に言えば、「回心」（7〜21 行目）→「恐れは愛の内にはない」（22〜25 行目）→「家」（26〜37 行目）→「人間の愛の現実」（38〜72 行目）→「完全な愛」（73〜144 行目）という展開を見ることができます。

そして、この説教で非常に重要なのは、「完全な愛」で話が終わらないことです。ここから説教は、もう一度、私たちの具体的な現実へ戻ってきます（145 行目以下）。「これで終わりと言われたって、私は恐れているんだ」（148 行目）という言葉が登場します。ここには、それまでの展開に対する一種の緊張があります。「恐れは愛の内にはない」と言われた。「完全な愛」が語られた。それでも、私は恐れている。この、それでも、が、説教をもう一度前へ進めます。バルトは、恐れている人間を単純に「信仰が足りない」として退けるのではなく、その人が「自分は外にいる」と考えているところへ話を進めます（149〜151 行目）。すると、ここで、それまでの「愛の内」という表現が、「内／外」という空間として働き始めます。そして、もし自分が「外

にいる」のなら、「どうしたら自分で中へ入ることができるのか」という問題が出てきます（152〜156 行目）。ここで説教は、人間が自分で動いて「外から内へ入る」という方向を一度、聴き手の前に置くのです。

ところが、ここで説教の方向が大きく反転します（157 行目以下）。バルトは、「私たちが完全な愛のこの家に自分たちで入っていく」（158〜159 行目）ことが重要なのではなく、「神のこの完全な愛が私たちのところにやって来る」（159〜160 行目）ことが重要だと語ります。ここが、この説教の構造を考えるうえで非常に重要な転換点だと思います。それまでの流れでは、「外にいる自分が、どうしたら内へ入れるのか」という方向が考えられていました。しかし、ここで方向が逆になります。私たちが神の愛のところへ行くのではなく、神の愛が私たちのところへ来る。つまり、「外から内へ」という人間の移動が、「神から私たちへ」という神の側からの出来事によって置き換えられるのです。すなわちここには、自分は外にいると思う→自分で中へ入ろうとする→その方向が否定される→神の愛が外にいる人間のところへ来る、という反転構造の動きが見られます。

この方向転換を経て、説教の最後では、最初の「回心」という言葉がもう一度違った形で見えてきます（151、157〜158、165〜180 行目）。最初には、「あなたが回心することが必要だ」（11〜15 行目）と語られましたから、私たちは最初、回心を「自分が何かをすること」として聞く可能性があります。しかし、説教の最後まで来ると、「外にいる人が自分の力で中へ入る」という話ではなく（158〜159 行目）、神の愛がすでに私たちのところへ来てくださっている（159〜164 行目）、そして聖霊によって私たちが「自分がどこにいるのかを見る」ことこそが回心だと語られます（181〜184 行目）。ですから、この説教の構造を大きくまとめるなら、私は、「回心」（7〜21 行目）→「恐れは愛の内にはない」（22〜25 行目）→「家」（26〜37 行目）→「人間の愛の現実」（38〜72 行目）→「完全な愛」（73〜144 行目）→「それでも私は恐れている」（145〜149 行目）→「自分は外にいる」（149〜151 行目）→「自分で中へ入ろうとする」（152〜158 行目）→「神の愛がこちらへ来る」（158〜164 行目）→「自分がどこにいるのかを見る」（165〜190 行目）という流れとして捉えることができます。ここで重要なのは、単に最後に「回心とはこういう意味です」と定義し直すことではありません。説教を最初から最後まで聴いたことによって、最初には自分の側の課題として聞こえていた「回心」が、最後には神の愛によって目を開かれる出来事として見えてくる。そのように、聴き手自身の理解が説教の時間の流れの中で動かされていくところに、この説教の構造があるのではないかと思います。

6.説教の言葉を四つの言葉に分類し、考察する——誰の言葉が、誰の言葉を受けているのか

ここからは、吉村分析論における「四つの言葉」を見ていきます。先ほどは、この説教が「回心」から始まり、「恐れは愛の内にはない」、「人間の愛の現実」、「完全な愛」、「それでも私は恐れている」、「神の愛が私たちのところに来る」というように、どのように動いていくの

かを見ました。では、その動きは、いったい何によって作られているのでしょうか。ここで吉村分析論が示しているのが、〈聖書の言葉〉、〈説教者の言葉〉、〈聴き手の言葉〉、〈神の名による言葉〉という四つの言葉です。ここで大切なのは、「この文章は〈聖書の言葉〉、この文章は〈説教者の言葉〉」というように、文章を分類して終わることではありません。四つの言葉を分けて見ていくと、この説教が、誰が語り、誰に向かって語り、その言葉を受けて次にどのような言葉が語られていくのかという、一つの語りの出来事として見えてきます。つまり、説教者がただ自分の考えを順番に述べているのではありません。〈聖書の言葉〉が語られ、それを説教者が受け取って語り、その語りが聴き手に向けられ、さらにそこから別の言葉が呼び起こされていきます。そして、その語りの中で、〈神の名による言葉〉がどこに現れてくるのかも見えてきます。ですから、この説教についても、「四つのうちどれが一番多いか」ということではなく、四つの言葉がどのようにつながり、どの言葉が次の言葉を生み出しながら、説教全体の動きを作っているのかを見ていきたいと思います。

まず、冒頭に注目します。バルトは、いきなりヨハネの手紙一第 4 章 18 節を解説し始めるのではありません。「あなたがたはみな確かに生涯に何度かは『回心』という言葉を聴いたことがあるでしょう」（7 行目）と、聴き手に語りかけます。そして、「あなたが本当に必要としていることは、あなたが回心することです」（11〜12 行目）と言います。ここでは、〈聴き手の言葉〉と〈説教者の言葉〉が前面に出ています。聴き手がすでに知っている「回心」という言葉を取り上げ、それを「私たちが必要としているもの」として、聴き手自身の問題へと近づけています。そのうえで、ルターの言葉を取り上げ（14〜15 行目）、さらに「私たちが先に聴いたみことば」（16 行目）へと向かいます。つまり、この説教は、〈聖書の言葉〉を最初から上から告げる、のではなく、聴き手がすでに持っている言葉や経験から出発して、〈聖書の言葉〉へと向かっていくのです。この説教はまず、「あなたがた」、「私たち」という聴き手の側に足場を置き、そこから〈聖書の言葉〉へ進んでいきます。

そこで中心に置かれるのが、ヨハネの手紙一第 4 章 18 節の、「恐れは愛の内にはない」という〈聖書の言葉〉です（22 行目）。ここから〈説教者の言葉〉が大きく展開していきます。バルトは「愛の内」という言葉を取り上げ、それを「家」として考えます（22〜27 行目）。そして「この家の秩序」「第一条」というような具体的なイメージを使いながら（28〜37 行目）、愛とは何か、人間の愛にはどのような恐れが入り込んでいるかを語っていきます（38 行目以下）。ここで大切なのは、バルトが〈聖書の言葉〉をただ引用して終わっているのではないということです。聖書の一つの言葉を受けて、〈説教者の言葉〉がその意味を展開し、その展開の中へ聴き手の現実を入れていくのです。つまり、〈聖書の言葉〉と〈説教者の言葉〉は競合していません。〈説教者の言葉〉が〈聖書の言葉〉を置き換えるのでもありません。むしろ、〈聖書の言葉〉を受け取った〈説教者の言葉〉が、それを聴き手が生きている具体的な世界へと展開していきます。そして、その過程で「私たち」、「あなたがた」、「私」、「あなた」という言葉が繰り返され

る。ここに、〈聖書の言葉〉、〈説教者の言葉〉、〈聴き手の言葉〉が一つの流れの中で結び合わされていることが見えてきます。

次に、大きな変化が現れるのが、「完全な愛」から「契約」へ進むところです（73〜144 行目）。ここでは〈神の名による言葉〉が強く前面に出てきます。バルトは、「神がこの契約におられます」（82 行目）、「この神が契約を立て、守られます」（83〜84 行目）、「神は価なしにこれをなさいます」（95 行目）と、神を主語とする言葉を次々に語ります。そしてヨハネの手紙一第 4 章 10 節やヨハネによる福音書第 3 章 16 節を取り上げ（95〜98 行目）、キリストの受肉、ベツレヘム、ゴルゴタへと語りを進めます（98〜102 行目）。ここで注目したいのは、単に「神について説明する言葉」が増えたということではありません。語りの重心が、「私たちはどうするのか」から、「神が私たちのために何をしてくださったのか」へ移っていることです。しかも、その神の行為は、人間が神を愛したから始まったのではない。「私たちが神を愛したのではなくて、神が私たちを愛してくださったのです」とヨハネの手紙一第 4 章 10 節が置かれます。したがって、ここでの〈神の名による言葉〉は、説教者が神について説明しているだけの言葉としてではなく、神が先に私たちへ向かって行動してくださったことを告げる言葉として聞こえてきます。

ところが、ここでもう一度〈聴き手の言葉〉が強くなります。あなたは本当にだれも恐れる必要はありません、と語ったあと（108〜110 行目）、バルトは、人に対する恐れ（110〜113 行目）、愛する人を失う恐れ（117〜119 行目）、過去や未来や死への恐れ（121〜122 行目）、自分自身への恐れ（125〜130 行目）、そして悪魔への恐れへと（136〜137 行目）、恐れを具体的に並べていきます。ここでは、先ほど語られた神の愛が、抽象的な教理としてそのまま置かれるのではなく、聴き手が実際に生きている恐れの世界へと向かっていくわけです。しかし、ここは「神の言葉から人間の言葉へ」という一方向の移動ではありません。それぞれの恐れが語られるたびに、再び〈聖書の言葉〉、〈神の名による言葉〉が置かれます。つまり、「私はこう恐れている」という聴き手の現実が出され、それに対して、「しかし神はこうしてくださった」という言葉が応答する（113〜115、119〜120、122〜125、130〜136、138〜140 行目）。この往復が繰り返されます。そして、ついに聴き手の側から、非常に強い言葉が出てきます。「それでも……私は恐れているんだ」（147〜148 行目）。ここでは、〈聴き手の言葉〉が説教の中に本格的に入り込みます。バルトはこの声を消してしまいません。むしろ、その声を受け止めたうえで、では、あなたは自分をどこに置いているのか、という問いへと進んでいきます。

この「それでも……私は恐れているんだ」という〈聴き手の言葉〉を受けて、〈説教者の言葉〉がもう一度働きます。「回心しない人はこう考え、こう語る」という形で、聴き手の側の考えを代弁しながら（145〜158 行目）、私は完全な愛の家の外にいるのではないか（149〜151 行目）、では、どうすれば中へ入れるのか（153〜155 行目）、という問いを置きます。ここで非常に興味深いのは、四つの言葉が固定した順番で並んでいるのではないことです。〈聴き手の言葉〉が出る（145〜151、152〜156 行目）。それを〈説教者の言葉〉が受ける（151〜152、157〜

158 行目）。その〈説教者の言葉〉が、さらに神の側から来る言葉へと向きを変える（158 行目以下）。その決定的なところでバルトは、「私たちが完全な愛のこの家に自分たちで入っていく」（158〜159 行目）のが重要なのではなく、「神のこの完全な愛が私たちのところにやって来る」（159〜160 行目）ことが重要だと語ります。ここで四つの言葉の関係そのものが変化します。人間の側から神へ向かう言葉ではなく、神の側から人間へ向かって来る言葉が中心になるのです。そして最後には、「眠っている者よ、起きなさい」、「恐れるな。私はあなたを贖う」という〈聖書の言葉〉が〈神の名による言葉〉として置かれ（184〜187 行目）、「神が私たちにこれを与えてくださいますように」という祈りで終わります（188〜190 行目）。

ですから、四つの言葉を分析して見えてくるのは、単なる「四分類」ではありません。この説教は、〈聴き手の言葉〉から始まり、〈聖書の言葉〉へ向かい、〈説教者の言葉〉によって〈聖書の言葉〉が展開され、その中心で〈神の名による言葉〉が語られ、それが再び聴き手の具体的な恐れへ届き、最後には〈神の名による言葉〉として置かれた〈聖書の言葉〉と、祈りへと収束していくという、複数の言葉の交わりによって成立しています。しかも重要なのは、それぞれの言葉が孤立していないことです。〈聖書の言葉〉は〈説教者の言葉〉を生み、〈説教者の言葉〉は聴き手の現実を呼び起こし、聴き手の「それでも……私は恐れているんだ」という言葉は、さらに、神の愛がこちらへ来る、という〈神の名による言葉〉を必要とする。そして最後には、再び〈聖書の言葉〉が聴き手に向かって〈神の名による言葉〉として語りかける。このように見ると、四つの言葉とは、説教を静止画として分類するための道具ではなく、説教の中で「誰が誰に語りかけ、その言葉によって何が起ころうとしているのか」を見るための道具だと言えると思います。先ほどの構造分析では、「この説教はどこへ動いたのか」を見ました。ここでは、その動きを、四つの言葉の交替と関係からもう一度見直したわけです。そして次の「鍵になる言葉」の分析では、今度はこの四つの言葉を横断して繰り返され、説教全体を結びつけている言葉――特に「回心」「恐れ」、そして「空間をイメージさせる言葉」――に注目していきたいと思います。

7.鍵になる言葉を提示し、考察する

ここでは、吉村分析論の「鍵になる言葉」という観点から、この説教を見ていきます。先ほどの「四つの言葉」の分析によって、この説教の中で、〈聖書の言葉〉、〈説教者の言葉〉、〈聴き手の言葉〉、〈神の名による言葉〉が、どのように関係しながら説教を動かしているのかが見えてきました。では、その動きを特に強く担っている言葉は何でしょうか。ここでは三つに絞ります。それが、「回心」「恐れ」、そして「空間をイメージさせる言葉」です。ここで大切なのは、単にこれらの言葉が何回出てくるかを見ることではありません。それぞれの言葉が、説教のどの場面に現れ、そこでどのような働きをし、説教が進むにつれてどのように意味や位置を変え

ていくのかを見ることです。そうすると、これら三つの鍵語が、説教の前半と後半をつなぎながら、聴き手の理解を動かしていることが見えてきます。

a)回心――最初に提示され、最後に意味が明らかになる言葉

最初の鍵語は「回心」です。説教は、「あなたがたはみな確かに生涯に何度かは『回心』という言葉を聴いたことがあるでしょう」（7 行目）という言葉から始まります。そして、「回心とは立ち返りのことであり、一人の人の生涯における新しい始まり、別の、よりよい道の始まりを意味します」（8〜9 行目）と説明し、「あなたが本当に必要としていることは、あなたが回心することです」（11〜12 行目）と語ります。ここだけを聞けば、「回心」とは、聴き手がしなければならないこととして提示されているように見えます。しかし、バルトはここで説明を終えません。「私は結びのところで再びこれに戻りたいと思います」（20 行目）と予告して、いったん「回心」を後景に退かせます。つまり、「回心」は最初に答えが与えられた言葉ではなく、説教の最後まで保留される問いとして置かれています。その後、説教は「回心」を直接説明するのではなく、「恐れは愛の内にはない」という言葉から、「愛の内」、「家」、「完全な愛」、「契約」、「神の愛」へと進んでいきます。そして後半になって、恐れている人が、自分は完全な愛の家の外にいる、と考える場面が出てきます（149〜151 行目）。ところが、そこで、どうすれば自分で中に入れるか、という方向には進みません（153〜158 行目）。「神のこの完全な愛が私たちのところにやって来る」（159〜160 行目）ことが重要だと語られます。そして最後に、「さて回心とはなんでしょうか」（173 行目）と、冒頭の言葉がもう一度呼び戻されます。ここで「回心とは全く単純に、私たちが目覚めて……自分のいるところを見ること」（175〜177 行目）と語られ、「外にいるのではありません。……完全な愛のただ中にいます」（178 行目）と続きます。つまり、冒頭の「回心すること」が、結末では、神によってすでに与えられている現実に目を開かれることとして聞き直されます。「回心」という言葉は、説教の最初と最後をつなぐだけでなく、その間にあるすべての展開を必要とする言葉になっているのです。

b)恐れ――人間の現実を露呈し、最後には「恐れるな」へ至る言葉

二つ目の鍵語は「恐れ」です。説教の前半では、「恐れは愛の内にはない」という聖書の言葉が置かれます（22 行目）。そこからバルトは「愛の内」という言葉を展開し（22〜37 行目）、人間的な愛について語ります（38 行目以下）。しかし、人間的な愛には恐れが残ります。他人が自分にひどいことをするのではないか（110〜113 行目）、愛する人が離れていくのではないか（117〜119 行目）、過去や未来や死が怖い（121〜122 行目）、自分自身が怖い（125〜130 行目）――そのように、恐れが具体的な生活の現実として掘り起こされていきます。そして、「それでも……私は恐れているんだ」（147〜148 行目）という声が出てきます。ここで「恐れ」は、単純に「なくすべきもの」として処理されているわけではありません。完全な愛について語られても、聴き手の現実にはなお恐れが残っている。その現実を、説教はそのまま語らせます。その

結果、恐れている自分は、完全な愛の家の外にいるのではないか、という自己理解が生まれます（149〜151 行目）。しかし、説教はそこからさらに進みます。最後には、「恐れるな。私はあなたを贖う。あなたは私のものだ」という神の言葉に至ります（186〜187 行目）。すると、「恐れ」という一つの言葉が、最初の「恐れは愛の内にはない」という聖書の言葉から、人間の具体的な経験へ、さらに「自分は外にいる」という自己理解へと進み、最後には神ご自身から語りかけられる「恐れるな」へと変化しています。つまり、「恐れ」は、単にこの説教が解決しようとしている人間の問題なのではありません。恐れによって人間の現実を露呈させ、その人が自分をどこに置いているのかを明らかにし、最後には神の言葉を必要とするところまで聴き手を連れていく言葉になっています。

c)空間をイメージさせる言葉――「内／外」「家」「入る」「来る」「下る」

三つ目は、一つの単語ではありません。「空間をイメージさせる言葉」です。具体的には、「内」、「外」、「場所」、「空間」、「家」、「中にいる」、「外にいる」、「入る」、「来る」、「下る」といった言葉です。これは、バルトが「愛」や「恐れ」という抽象的に聞こえるかもしれない事柄を語るときに、それを聴き手が身体的にイメージできる空間へと置き換えているところに特徴があります。最初に、「恐れは愛の内にはない」（22 行目）と語ったところで、バルトは「愛の内」を、「人がおり、住み、座り、立ち、歩くことのできる場所、空間、家」（23〜24 行目）のように展開します。すると、「愛の内」という聖書の言葉は、単なる抽象的な概念ではなく、「自分はその中にいるのか」という問題として聞こえてきます。さらに、「愛の家」には秩序があり、「恐れは愛の内にはない」ということが、その家の第一条として語られます（28〜37 行目）。ところが、人間的な愛の家には恐れが残っています（64〜72 行目）。そこで、さらに「全く別の家」「完全な愛、神の愛の家」が示されます（73〜74、105、141〜142 行目）。このように、「家」という空間によって、人間的な愛と完全な愛との違いが、聴き手に具体的にイメージできるようになります。

そして、この空間語が後半になると、単なる説明のための比喩ではなく、聴き手自身の「現在地」を問題にする言葉になります。「それでも……私は恐れている」と言う人は、「私は完全な愛の家の中にはいない」と考え、自分は「どこか外に」「危険な路上に」いると思う（147〜151 行目）。そして、「どうしたら確かにそこに入っていけるのか」と考え、「壁を乗り越える」「窓を打ち壊す」「中に入る」という、人間の努力による移動を想像します（153〜156 行目）。しかし、ここで説教の方向が大きく反転します。バルトは、「私たちが完全な愛のこの家に自分たちで入っていく、乗り越えたり、忍び込んだりするのが重要なのではなくて、神のこの完全な愛が私たちのところにやって来るというのが重要」と語ります（158〜160 行目）。さらに、「天に建ててくださった家」を「私たちの貧しい、暗い地上に下らせて」くださった、と語ります。つまり、「外にいる人間が、自分の力で中へ入る」という方向が、「神の愛が人間のところへ来る」「神の家が地上へ下る」という方向へ逆転します（162〜164 行目）。ここで「内／外」、

「入る／来る」、「上／下」という空間語が、単なる比喩ではなく、人間から神へ向かうのではなく、神が人間のところへ来てくださるという福音の方向そのものを担う言葉になっています。

以上の三つの鍵語を重ねて見ると、この説教がどのように一つの出来事へ向かっているのかが、かなりはっきりします。「回心」は、最初に提示され、いったん保留され、最後に「目覚め」として聞き直されます。「恐れ」は、聖書の言葉から出発して、人間の具体的な現実を露呈させ、最後には「恐れるな」という神の言葉によって新しい位置に置かれます。そして「空間をイメージさせる言葉」は、その過程を「内／外」、「家」、「入る」、「来る」、「下る」という身体的なイメージによって可視化します。特に重要なのは、最後に変化するのが、単純に人間の「場所」ではないことです。「外にいる」と思っていた人が、自分で中へ入るのではありません。神が完全な愛をご自身の側から私たちのところへ来させ、そのことによって人間が「自分のいるところを見」て（177 行目）、「自分がどこにいるのか気付」くようになる（183 行目）。したがって、三つの鍵語はそれぞれ別々の働きをしているのではなく、「回心」という問い、「恐れ」という人間の現実、「内／外」、「家」、「来る」といった空間的なイメージが結びついて、聴き手の「自分はどこにいるのか」という認識を変えていくのです。ここに、この説教における三つの鍵語の働きがある、と考えることができます。

8.語り口を考察する

a)聴き手に向かって語る――「あなたがた」の中へ説教を置く

ここまで、説教の構造、四つの言葉、そして三つの鍵になる言葉を見てきました。ここでは、それらが、実際にはどのような「語り方」によって聴き手のところへ届けられているのかを見ていきます。吉村分析論で大切なのは、説教を文章として読むのではなく、まず「語られる言葉」として捉えることです。説教は、神学的な内容を整理して記述する論文ではありません。具体的な人間に向かって、今ここで語りかける言葉です。この点からバルトの説教を見ると、最初から最後まで、聴き手を目の前に置いて語っていることが分かります。冒頭の「あなたがたはみな確かに生涯に何度かは『回心』という言葉を聴いたことがあるでしょう」（7 行目）という言葉も、「回心とはこういう意味です」と説明を始めているのではありません。まず「あなたがた」に向かって、「この言葉を聞いたことがあるでしょう」と呼びかけ、聴き手自身の経験の中へ「回心」という言葉を持っていきます。つまり、語り口そのものが、聴き手を説教の外に置かず、最初からその中に置こうとしているのです。

そして、この「語られる言葉」という性格が、後半になるほどはっきりしてきます。バルトは、聴き手が実際に心の中で言うであろうことを、説教の中で先に語ってしまいます。「だれも私を愛してくれない。私もだれも愛したことなどない。……私は孤独だ」（58～59 行目）という言葉もそうですし、もっと決定的なのが、「一体私がその中にいるだって。それでも……私は恐

れているんだ」（147〜148 行目）という言葉です。ここでは、「孤独な人もいます」、「恐れている人もいます」と第三者について説明しているのではありません。その人自身の声を、バルトが説教の中で語っています。すると聴き手は、外から「恐れについての説明」を聞くのではなく、自分の中にもあるかもしれない声を聞くことになります。しかも、「それでも……私は恐れているんだ」と言わせることで、聴き手が福音を聞いたときに生じる抵抗まで、説教の中に取り込んでいます。バルトはその抵抗を「信仰が足りない」として切り捨てません。むしろ、その抵抗を十分に語らせるのです。ここに、この説教の対話的な語り方の特徴があります。

b)聴き手の反論を語らせる――問いを福音へと反転させる

さらに重要なのは、バルトが聴き手の反論を取り込んだまま終わらせないことです。「私は恐れている」、だから「私は……完全な愛の中にはいない」（149 行目）という理解になります。そこからさらに、「どうすれば……そこに入っていけるのか」（153〜154 行目）という問いが生まれます。そしてバルトは、その問いを途中で止めません。「壁を乗り越えるのか、多分窓を打ち壊すのかな。中に入るって、どんな技が、どんな緊張が、どんな努力が要ることだろう」（154〜155 行目）と、聴き手が考えそうなことを、そのまま徹底して語ります。ところが、その問いが十分に展開されたところで、「私たちが完全な愛のこの家に自分たちで入っていく……のが重要なのではなくて」（158〜159 行目）と、方向を反転させます。ここでバルトがしているのは、単に「あなたの考えは間違っています」と別の答えを与えることではありません。聴き手自身が立てていた問いを、その問いの中からひっくり返しているのです。どうすれば私が中へ入れるのか、という問いが、「神のこの完全な愛が私たちのところにやって来る」（159〜160 行目）という福音へと変えられる。この意味で、この説教の語り口は、聴き手を説得するために反論を封じるのではなく、聴き手の反論を語らせ、その問いが行き着くところまで一緒に進み、そこで問いそのものを変えていると言えます。

c)教会の言葉を生活の言葉の中で語る――福音によって現実を新しく見る

また、この説教の語り口を考えるうえでは、教会の言葉と生活の言葉とが重ねられていることが重要です。「回心」、「完全な愛」、「神の契約」、「聖霊」といった言葉は、教会が受け継いできた神学的な言葉ですが、バルトはそれらを神学用語として説明して終わりません。聴き手が具体的に想像できる生活の言葉をその周囲に置き、神学的な言葉によって生活の現実そのものを新しく見せていきます。たとえば「完全な愛」という抽象的に聞こえるかもしれない言葉を、「人がおり、住み、座り、立ち、歩くことのできる場所、空間、家」（23〜24 行目）として語ることで、「愛の内にいる」という見えない現実が、「家の中にいる」という身体的なイメージになります。とりわけ重要なのが「神の契約」です。バルトは「神がこの契約を結び、神と私たちの間に打ち立てようとしておられる」（93〜94 行目）、「神は価なしにこれをなさいます」（95 行目）と、これを明確に神学的な言葉として語ります。しかし、その「神の契約」を抽象的な教

理として説明するのではなく、神が「私たちのところに来てくださ」り（99〜100 行目）、「私たちの隣人とな」られ（100 行目）、「みどり子としてベツレヘムの飼い葉桶に横たわ」られ（101 行目）、「ゴルゴタで十字架につけられた」（101〜102 行目）という具体的な出来事へと結びつけます。そして「これが神の契約です。これが完全な愛、神の愛の家です」（105 行目）と語る。つまり「神の契約」という教会の言葉によって、キリストにおいて神が私たちのところに来られたという現実を、聴き手の前に具体的に見せているのです。同じことは「聖霊」という言葉にも見ることができます。バルトは「聖霊が一人の人の心に語るならば、この人は回心し……目を開きます」（181〜182 行目）と語りますが、ここでも「聖霊」という教会の言葉を別の言葉に置き換えるのではなく、「目を開きます」（182 行目）、「自分がどこにいるのか気付きます」（183 行目）という生活の言葉によって、その働きを具体的な出来事として語ります。回心していない人は、眠りの中で、自分がまだ恐れなければならないと夢見ている（169〜172 行目）。しかし聖霊が語ってくださると、その人は目を開き、「外にいるのではありません。……完全な愛のただ中にいます」（178 行目）と気づく。つまり聖霊は、単に「恐れをなくす力」ではなく、「私はどこにいるのか」という自己理解そのものを変えるものとして語られているのです。その結果、「回心」の意味も変わります。冒頭では「回心すること」が人間の側の行為として聞かれるかもしれない言葉で語られますが（8〜15 行目）、最後には、聖霊によって目を開かれ、自分がすでに完全な愛の中にいることに気づく出来事として語られる（173〜187 行目）。ここで大切なのは、神学的な言葉を生活の言葉に置き換えてしまうことではありません。「回心」、「完全な愛」、「神の契約」、「聖霊」といった教会の言葉をそのまま保ちながら、それらを「恐れる」、「孤独だ」、「失う」といった聴き手が実際に経験する生活の言葉や、「眠っている」、「目を開く」といった身体的な経験を用いる言葉の中で聞かせています。そして、「自分がどこにいるのか気づく」という表現によって、その言葉が聴き手自身の自己理解にまで及んでいくのです。そのため、この説教では生活の現実が単に分かりやすく説明されるのではなく、教会の言葉、すなわち福音の言葉によって、その現実そのものが新しく見直されていくのです。

9.自分の第一印象の理由を考察する。

10.さらにこの説教に関して——「恐れ」から「目覚め」へ

　ここまでの分析から、本説教が聴き手に「あなたはすでに完全な愛の中にいる」という福音を受け取らせようとしていることが明らかになりました。しかし、ここには一つの批判的な問いが残ります。バルトは、聴き手の「それでも私は恐れている」という現実を十分に受け止めているのでしょうか。確かにバルトは恐れを無視してはいません。むしろ、人間が抱えるさまざまな恐れを具体的に挙げ、「それでも私は恐れている」という聴き手の反論を説教の内部に取り込んでいます。そして、その恐れから「私は完全な愛の外にいる」と考えることを、「眠っているこ

と」「自分がどこにいるのかを知らないこと」として捉え直します。したがって、バルトが問題にしているのは、恐れが存在することそのものというよりも、恐れを根拠として自分の存在の場所を判断してしまうことなのだと思います。しかし、それでもなお、神の完全な愛の中にある者が、死や喪失、罪や人間関係の中で実際に恐れ続けるという現実を、バルトがどのように神学的に位置づけるのかという問いは残ります。神の愛によって恐れの支配が打ち砕かれることと、恐れそのものがなお人間の中に生じることとは、同じではないからです。

しかし、この点をただ本説教の欠点として指摘するだけでは、バルトがこの説教で何をしようとしているのかを十分に捉えられないと思います。おそらくバルトは、この問題を知らないのではなく、知ったうえで、あえてこのような説教をしているのではないでしょうか。彼がここで願っているのは、恐れについて聴き手に正確な神学的説明を与えることよりも、恐れに支配されて「自分は神の愛の外にいる」と思っている人に、今ここで信仰の転換が起こることです。「あなたはどこにいるのか」と問い、「あなたはすでに家の中にいる」と告げ、「眠っている者よ、起きなさい」と迫る。その言葉は、聴き手に、自分がどこにいるのかについての判断を変えるよう迫ります。ここには確かに、信仰の決断への強い促しがあります。そして、このような迫りは、一歩間違えば、「恐れないようにしなさい」、「信じなさい」、「目を覚ましなさい」という人間への要求となり、律法主義に陥る危険を持っています。しかしこの説教は、そこで終わりません。回心、すなわち目を開かれる出来事を、最終的には人間自身の力によるものとはせず、聖霊の働きとして語ります。そして最後には、「神が私たちにこれを与えてくださいますように」と祈ります。つまり、聴き手に決断を迫りながら、その決断を生み出す力そのものを神に委ねているのです。

そう考えると、本説教においてバルトが起こることを願っている出来事は、単純に「恐れなくなること」ではないのではないでしょうか。それは、「私は恐れている。だから私は神の愛の外にいる」という自己理解から、「私は恐れている。しかし、それでも私は神のものである」という自己理解へと、聴き手が神の言葉によって移されることです。その意味で、「回心」とは、自分で愛の家の中へ入ることではなく、すでに神が自分を置いてくださっている場所に目を開かれることです。そして、その目覚めを自分の力による達成にしないために、説教は祈りへと移っていきます。ここに、本説教の説教的な強さがあります。バルトは、聴き手をただ慰めて恐れをそのままにしておくのではなく、福音によって恐れに対する自己理解を根本から揺さぶり、今ここで「目を覚ます」ことを迫ります。しかし同時に、その目覚めを聖霊のみわざとして神に願います。したがって、本説教の批判点は、バルトが恐れを理解していないことではなく、恐れながらなお神の愛の中に生きる人間の姿を十分に展開していないことにあります。しかしそれは、この説教が「説明」よりも、聴き手の中に福音による「出来事」が起こることを優先した結果とも理解できます。ここに、バルトの説教が持つ強さと、その説教学的な特質を見ることができるのです。